松江城天守の国宝指定

～63年ぶりの城郭天守の国宝～

文化庁文化財部参事官（建造物担当）

松江城天守は、5月に国宝指定の答申がなされました。城郭の天守としては、昭和26年の姫路城、同27年の松本城、犬山城、彦根城以来、63年ぶりの国宝指定です。

国宝とは何か、なぜ今回、松江城天守が国宝になったのについて解説します。

1 城郭天守として63年ぶりの国宝指定

平成26年5月15日の文化審議会において、島根県松江市の松江城天守について、国宝指定するよう文部科学大臣に答申されました。官報告示を経て、正式に国宝となる見込みです。

昭和25年制定の文化財保護法に基づき、国宝保存法で文化財に指定された近世城郭建築から、四つの城の天守が国宝となっています。昭和26年の姫路城、昭和27年の松本城と犬山城及び彦根城の各天守がそれですが、松江城天守は城郭建築の国宝指定として実に63年ぶりとなります。

そもそも、国の文化財指定は、国宝と重要文化財という2段階になっています。現在（平成27年6月1日現在）重要文化財は2428件4695棟ですが、国宝は221件271棟で、重要文化財の僅か9％（件数比）です。

文化財保護法では、文部科学大臣が「有形文化財のうち重要なもの」を重要文化財に指定できます。国宝は「重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たぐいない国民の宝たるもの」です。更に「国宝・重要文化財（建造物）指定基準」で、国宝は「重要文化財のうち極めて優秀で、かつ、文化史的意義の特に深いもの」とされています。つまり、国宝は重要文化財のうち、特に優秀であるだけでなく、世界文化という目で見ても価値が高く、文化史的意義が特に深いものなのです。

松江城天守外観（南東より）

2 松江城天守の価値とは

それでは、松江城天守がどのような建造物で、どこが評価されたのかを簡単に説明します。

松江城は、松江市街の中心部、亀田山に築かれた平山城（ひらやまじろ）です。慶長5年（1600）に出雲・隠岐の領主となった堀尾氏が、同12年より築城を開始し、同16年にほぼ完成しました。現在の天守はこのときにつくられたものです。

外観は四重、内部五階、地下一階の形式で、正面の南面には玄関となる附櫓（つけやぐら）を設けています。屋根は全て本瓦葺（ほんかわらぶき）です。軸部は長さ2階分の通し柱（ばしら）を多用しており、周囲に包板（つつみいた）を釘（くぎ）や鎹（かすがい）、帯鉄（おびてつ）で取り付けた柱も多数見られます。また部材の番付（組立てに必要な印や番号のこと）は2種類に大別されます。このうち2階以下に用いられた分銅紋に「富」の字を刻む部材は、安来市にあって、堀尾氏が最初に入城した中世山城である富田城（とだじょう）の部材と思われます。

昭和10年5月13日、松江城天守は国宝保存法によって国宝に指定されました。そのときの指定説明は「松江城ハ堀尾吉晴の築キシ所ニシテ慶長十二年起工慶長十六年功ヲ竣（すゅん）ヘタ其天守ハ慶長十五年落成セシモノニシテ本城現存唯一ノ遺構デアル五層天守ニシテ（屋根四層）形態荘重頗（すこぶ）ル安定ノ観を呈シテイル」となっています。

確かに松江城天守は、中国地方に唯一残る荘重雄大な四重五階の天守です。最近になって2枚の祈祷札が再発見されたことで、慶長16年の完成が明らかとなりました。

また建築的には、通し柱による構法などの独自の特徴を有し、近世城郭最盛期を代表する建築として極めて高い価値があります。さらに、防御性を重視した中世山城から、高層化して近世都市の基軸へと進展してきた城郭文化の様態をあらわしており、深い文化史的意義もあります。

3 なぜ今、国宝になったのか

既に一定の評価がなされた文化財でも、その後の個別調査や保存修理等の機会に得られた新たな知見、周辺分野での調査研究の進展により価値が高まることがあります。松江城天守に関する評価は、近年、松江市が取り組んできた専門家による多面的かつ包括的な学術研究の成果によるところが大きいのです。

現存する天守の中には、建築年代を後世に編纂された資料などによる場合があります。松江城天守も、これまでは宝暦年間の成立とされる『雲陽大数録』によっていました。しかし平成24年、長らく所在不明であった慶長16年の年号が記された祈祷札2枚が再発見されました。これらは柱に残された釘穴及び痕跡から、地階中央にある2本の通し柱に付けられていたことが分かりました。

ここに元和元年（1615）の一国一城制以前の建築年代が明確な天守として、慶長11年の彦根城天守、同13年の姫路城天守と肩を並べるに至り、松江城天守の価値は著しく高まったのです。

松江城天守内部（地階）

一方、城郭史研究では天守を大きく4類型に区分していますが、独立型が犬山城天守、連結・複合型が松本城天守、聯立型が姫路城天守です。複合型とされる松江城天守は、年代及び規模とも同類型の彦根城天守に匹敵する存在といえるのです。

軸組全体の中で相互かつ均質に配置した2層分の通し柱は、建築的に進歩的な構法と評価されています。4階5階の通し柱の5階部分を細くした技法は、姫路城大天守と同じ当時最新のものです。また、包板は軸部を強化する役割を果たしたと思われ、東大寺大仏殿の柱に通じる特色です。

更に城郭は乱世の終焉とともに、16世紀中期までほとんどを占めていた防御性重視の山城から、集住・交通・経済などの実用性重視の平山城や平城へ転換しました。城郭と都市の一体化が進展し、城郭建築最盛期の中で、部材を含めて富田城からの移転が明確な松江城天守は、建築史や都市史及び文化史において存在意義が大きいのです。

4 終わりに

かつて姫路城などが国宝に指定された当時、松江城天守は昭和大修理の最中でした。昭和30年3月の工事完了から数えて、まさしく還暦を迎えて国宝となるのですが、決してこうした節目ということで国宝になったわけではないのです。

松江城天守は天守台石垣上に南面して建っています。山頂に構えた本丸の北東端、高壮な石垣に屹立した荘重雄大な外観は、近世都市における象徴的な存在感を今に伝えています。松江城は、近代の困苦を乗り越え、着実に整備されてきましたが、もちろんその全盛期の威容を取り戻すのは難しいと思います。それでも、松江城天守の国宝指定を機に、松江が新たな歴史都市として飛躍することを期待しています。